第４回丹波新地域ビジョン検討委員会　記録

１　**開催日時**　　令和３年９月１４日（火）　１８：００～２０：００

２　**場　　所**　　柏原総合庁舎　柏原職員福利センター　１階会議室

３　**出 席 者**

委　員（五十音順）
足立委員、上甫木委員、角野委員長、岸委員、清水(夏)副委員長、
清水(徳)委員、鈴木委員、瀧山委員、谷水委員、土性委員、中川委員、
藤田委員
専門アドバイザー
光井アドバイザー、平櫛アドバイザー

※欠席委員：安達委員、構井委員、宮垣委員

事務局
丹波県民局：今井県民局長、柳瀬県民交流室次長、西原班長、竹村
本庁ビジョン課：吉住主幹

４　**内　　容**

（１）開会
・角野委員長あいさつ

（２）議事

①検討状況の報告

②概案の説明

③骨子案の説明

（３）閉会

５　**議 事 録**

（１）開会
角野委員長
・第４回目の委員会となる。

・今回からアドバイザーに入ってもらった
・いよいよ本文作成に向け大詰めとなっている

（２）議事
議題（１）丹波新地域ビジョン検討状況・プロセスについて
事務局から説明【資料２】

角野委員長
・事務局の説明で、ご意見等はあるか。

上甫木委員
・色々なところで意見を聞かれていて多くの情報が入っていると思う。また、次の世代につなぐという意味で、社会教育施設や学校等と連携し、重要な役割を担ってもらうことが必要になってくると思う。庁内ワーキング会議には、そのような所からのメンバーは入っているのか。

事務局
・教育委員会から、庁内ワーキング会議のメンバーに入っていただいている。

角野委員長
・7月のたんば未来デザインセッションを聴いていただいた方で、ご感想などはないか。

岸委員
・セッションの中で私としてはショックを感じたのが、特に空間像について。
・人口減が不可避な中で丹波地域を統一的に運営していくためには、一定程度の人口密度が、まちづくりには欠かせないという話だった。４千人が徒歩10分以内に交流できるというような居住空間を考えていかないと、今のような小さな集落がたくさんあるような中においては行政施策も充分に届かないし、文化も保ちづらいというところで、大きな課題を突きつけられている。そういうことをしっかり検討していかないと丹波地域がもたないと言われているようで、ショックと感じた。
・同時に、では具体的にどんなことを考えていけばよいかというときに、事務局からは、自分なりに30年後のストーリーを作ってみるよう言われていた。そういった社会が実現したときというのは、これまでのような個人財産に基づく家や農地ではなく、もっとレンタルのような形を中心に考えていくようにしないといけない。
・今の延長線で何かをつくり出そうというよりも、むしろ協働して自分たちの財産を持ち寄って、新しいまちづくりを図っていただければならないのかなと感じる。ここで討議されたということが、素晴らしい、色々なアイデアを提供していただいた会であり、とても嬉しかった。

角野委員長
・アドバイザーの光井さんには、セッションのゲストとしてお話いただいたが、改めてこの場でご意見などはないか。

光井アドバイザー
・ビジネスモデルを専門にやっている。
・今回色々な詳細な調査の中で出てきているような、将来的に人が少なくなってきて、現在と同じようなことを維持したいということは、そもそも無理だというふうに考える。
・そうなってくると、何を残すのか。その残し方として、外部との交流人口を増やしていく方向性が示されていくが、その交流人口にとって魅力があるようなプロジェクト、魅力がある要素を優先的に残さなければ、そういった人は供給されていかない。
・あとは、現在いる方々をもっと有効に活用するとなれば、AI農業など様々なことも触れられているが、１人の人間が１つの仕事を専業でやるのではなくて、１つの仕事では収入の0.5ぐらいしか得られないけれども、週２日５時間程度、10時間ぐらい働いてそれぐらいの所得が得られるような時代になれば、兼業で２つ３つの仕事を皆さんができるようになる。もしくは仕事を最小限に絞って、芸術文化的な活動をしたり、様々なことができるような里山というのが、丹波の一つの形というふうに考える。
・足りない資源も集めた中で、魅力ある活動の優先順位をつけて、それを地域の方々及び外部から、丹波に興味を持つ方々が成していけるようなフィールドを提供していくとよいと考える。そうすれば、今回色々並べていただいているものが、一気通貫でうまく並んでくれるのではないかという印象を持った。
・結局、総花的にそれぞれの方に意見を聞くと、それぞれの主観から色々な意見が出てくる、それを人と物とお金という経営資源、あと情報とか移動手段といったものを重ね合わせて、それでできることを絞り込んで、これらのことをやれば魅力が増えるから、どんどん経営資源が集まってくるのだ、という考え方で議論を進めていただくと、それぞれのピースがうまくまとまり、皆さんの議論もまとまるのではないかというイメージを持っている。

角野委員長
・8月には、丹波の歴史の勉強もされたということなので、事務局から説明をお願いします。
事務局から説明【参考資料２】

角野委員長
・岸委員も参加されたとのことで、補足することなどはあるか。

岸委員
・今、丹波地域は２つの市に統合された形になっているが、生活意識は、明治の始めの村の意識とあまり変わらないぐらいのレベル。丹波篠山市・丹波市という

「市民」のレベルでの概念ではつくれないような、もっと小さな集団での利害得失ということにこだわっているなと感じた。
・これから先の丹波地域を考える場合、それぞれの地域では、大きな括りでの市民意識のようなところまでなかなか追いついていないのではないかと感じ、少し悲しかった。

議題（２）丹波新地域ビジョン概案について
事務局から説明【資料３（４、５）】

角野委員長
・事務局の説明を受けて、検証結果のとりまとめのプロセスや方向性は妥当か、あるいは基本的理念・視点はこのような形でどうかというところについて、ご意見を頂戴したい。

上甫木委員
・基本的な構成はできてきていると思う。その上であえて２点申し上げる。
・基本理念について、森を守ることと、農を活かすことは、違う意味を持っているのではないかと感じる。評価検証の中では、「農林業」と一括りにされているが、農業は１年のサイクルで回るのに対し、林業は長いスパン。そのような関わる時間軸の差を捉えておく必要はある。林業は生業にも関わるが、防災や生物多様性など多様な側面をじっくり育てることによってできてくる。農業と林業は別々に捉えると、基本的理念がもう少し具体的に分かりやすくなると思う。
・もう１点、世代をつなぐ、環をつなぐということだが、若い世代の方が丹波の森をあまり知らないということがアンケート結果で示されていた。次の世代を育てていくことが重要。小学校では比較的環境教育もされているようだが、中高ではあまりされていないと聞く。その辺り、学びや体験の場もしっかり育てていく必要があると感じる。

事務局
・基本理念における「森」は、丹波の地域空間全体を表す言葉、空間や資源なども含むような意味合いで使っている。この辺り、もう少し分かるように工夫をしていく。

藤田委員
・地域ビジョンの評価検証ということでまとめられているが、この検証結果について、例えば、検証委員会などで検証するのか、プロセスを少し詳しく教えていただきたい。

事務局
・まさしくこの場が検証委員会だという位置づけにさせていただいている。
・アンケート調査は９月末まで実施中のため、本日示しているものは中間報告的なものとなっている。とりまとめ後、再度構成をし直し、検討委員会の皆さんに何らかの形でお諮りをさせていただく。

谷水委員

・初回の会議で、どこの地域でも書けるような総花的なビジョンはやめていただきたいと申し上げていた。それが今回絞った形で示していただいたと感じている。

・「森」や「農」と絞っており、丹波らしくて良い。一方で、丹波の中でこれらに関わっている人は何人いるだろうか。実際に地域で生活している人には無理があるビジョンと感じる。

・全体的に、若い女の子に丹波に帰ってきてもらうという視点が入っていない。高校や大学で丹波から出て、男の子は跡取りなどで戻ってくるが、女の子は特に戻ってこず、子どもも減りどんどん高齢化が進む。

・「森」「農」「地域」などと言われると、若い女の子は帰ってきにくくなるので、その辺りを覚悟して取り組まないといけない。

・丹波に残ってくれた人がやりがいを持って輝けるような視点がないといけない。

・出て行った若い子に、帰ってこいと親が言えるかどうか。トライアンドエラーができる。起業もできる。子育てもできる。丹波で一緒にやろうと思えるかどうか。

・子供たちは丹波のことが好きで、何とかしないといけないと真剣に考えている。でもそこから先、大学に行ったあと丹波に帰ってきてくれるか。帰ってきたいという受け皿を作っておかないといけない。

瀧山委員

・子育ての面でのプランはあるが、子ども目線が少し足りない。子どもたちが丹波の地域に興味をもって住み続けられるように、子どもの人権を尊重できるような地域づくりができるようにしてほしいと思う。

・女の子に帰って来てほしいという意見もあったが、男女関わらずでお願いしたい。

・農村を守っていくことが丹波の景色を守ると言うこと。集落営農が立ちゆかなくなってきているので、もっと広く捉えた農業のやり方を検討して欲しい。

清水夏樹委員

・指標等の検証結果について、アンケートなどの量での検証もあるが、質による検証も必要なのではないか。

・農業の生産物は変ってきていると思う。丹波ブランドなどの質を評価してはどうか。

・基本理念について、少し古い感じがする。生業にひっかかっている。今は複業の時代なのに生業というと、ひとつの仕事のイメージがある。

・森を守る。森宣言の丹波の空間すべてを指す森という考え方は好きで、丹波は源流域ですべてを守っているという誇りを、もっと言ってよいのではないか。

光井アドバイザー
・今回のものは現在の価値観でしか書かれていない。大都市の近郊で、日帰りで自由に移動ができる、二重生活ができる地の利を活かす。
・今後のことを考えると、３つくらいの仕事を掛け持ちして、都会で週４日働いて丹波には週３日しか帰ってこないような形で若い人が生活を続けていく。これまでフルタイムでしか働けなかった農業や林業が、AI化などで週１回のアルバイトで、高齢者や忙しい人でも従事できて、トータルでワークシェアリングするという推進体制を、丹波が導入・発信していくというのがよいのではないか。
・若い人たちが二重三重の経験ができるという、教育的効果を持つということも発信していく。新しい人が注目して丹波のファンを増やしていくのがよい。

清水徳幸委員
・基本理念をそのままよしとすると、気になることが２点。安全という視点が抜けている。
・生業というか仕事の視点。丹波ならではの起業。スモールスタート、チャレンジしやすい思考がでてくるとよい。

土性委員
・先ほど出てきた農業体験で週２、３日丹波に来るという意見だが、農家もいっぱいいっぱいで無理。行政が支援してくれたらできるかもしれないが。それで移住者が増えるとは言えない。そんな試行錯誤を篠山も繰り返している。
・三尾山の景色がすばらしいといつも思うが、自然と先端技術との融合に期待。

角野委員長
・「農」の概念を変えていく必要がある。流通システムや６次産業化、環境との関係。我々が伝えたい農はこんなものだということを書いておく必要がある。若者たちに共感してもらえる農の概念が必要。

議題（３）丹波新地域ビジョン骨子案について
事務局から説明【資料６】

平櫛アドバイザー
・今回の骨子案はしっかり内容も盛り込まれている。関係人口について、さまざまな事例を目の当たりにしている。例えばある地域では、ふるさと納税に載せるような新しい６次産業化が進んだりするなど、新しい取組みが生まれている。
・関係人口の取り組みによって、新しい次世代コミュニティのかたちが見えてくる。地域外の人と、新しいビジョンやプロジェクトを進めることによって新しいコミュニティを作っていく可能性はすごくある。例えば東京でも丹波という名前は売れている。
・中高生を巻き込むには、創造ということにつきる。新しいことに大人が取り組み、中高生も一緒に参加したいと思う。そうすることで地域外の人を取り込む。世界の丹波スタイルとして誇れるように、丹波地域自体が全体を巻き込む、新しい次世代コミュニティを是非考えていただきたい。

光井アドバイザー
・丹波は今までなかった種が育っているが、社長になるような責任感を持った人がいない。
・行政に要望する人は多いが、自分で何かするという人は育っていない。
・優秀な人は市役所や県民局、金融機関に集まる。彼らに複業を勧め、教育研修をする。
・耕作放棄地への収益を考える必要はないので、そこで複業を進める。
・土地と人をどう活用するのか。
・働き方改革が進むので、複数役割の時代になる。役割分担ではなく、共同で役割を持つ。

鈴木委員
・視点やシナリオなど、キーワードが多すぎる。
・基本理念、基本的視点、シナリオの相互関係が見えづらい。
・言葉をしぼって表現する方が、読む方にわかりやすい。
・基本理念はみんなが共感できるものでなければならない。
・シナリオに基本的視点がどう組み込まれているのか。
・こういう計画は立てるまでは様々な議論をしていくが、指標を明確に作っておく必要があり、その目標にむけての推進体制を作っておく必要がある。指標と推進体制を議論すべき。

清水夏樹委員
・挑戦的なムーンショットを作っているが、そのムーンショットが盛り沢山すぎる

中川委員
・色々なキーワードがあって、自分も混乱している。
・若い世代の女性が移住をするとか、丹波の地を選ぶことをイメージしたとき、この資料そのものが広報資料になるわけではないと思うが、「なぜ」というところがないまま、これとこれをやりますというように見えてしまっている気がする。
・「なぜ」というところがキーワードよりも先に伝わってきくることができれば、丹波地域に住む一市民として、ビジョンを自分のものと思えるのではないか。

足立委員
・内容が盛り沢山なので、もう少しスリムでわかりやすく。
・参加している委員自体が内容を把握しきれない。
・内容を、市民の方にも明確にわかりやすく伝わるものに。

谷水委員
・本当にふるさと丹波に帰りたいと若い人が思っているのか。ふるさとという言葉自体が年寄りがつくったビジョン。チャレンジができるとかトライアンドエラーができるとかいったことを盛り込んで欲しい。若い人が丹波に帰ってこない一番の理由は、働くところがないこと。丹波は優秀な子をたくさん都会へ排出しているが、その子たちが丹波で働くイメージを作ってほしい。

上甫木委員
・社会像、空間像、人間像と分けてあって、シナリオもその分野に分けられているが、重なる部分があるので、そこは集約してはどうか。

角野委員長
・社会、空間、人間という分野分けは問題ないか。
・今まで安易に使っていた言葉をひとつひとつ見直す必要があるのではないか。
・若い人にも共感してもらえる言葉に。

鈴木委員
・この計画を誰に読んでもらいたいかというと、おそらく若者層だと思うが、10代、20代、30代といった世代がここの議論の場にいないのが問題。30年後を考えるときに、彼らの感覚も入れていかないといけない。
・今後、目標を改善しつつ、目標に近づけていくための仕組みや体制作りのところで、その世代を取り入れられないか。そういうところに力をいれて、若い年代がチャレンジしたり、意見を言ったり、参画できる体制づくりをしてほしい。

平櫛アドバイザー
・会社で2050年に向けた会社の計画を作っているが、20代の人を集めて50代のことを考えてもらっている。
・セレクトバックキャストというやり方をしてはどうか。
・大阪、関西万博もあるので、若い子もチャレンジできるような仕組みがあればいい

角野委員長
・以前、若者から未来のアイデアを集める作業もしていたと思う。そういうところからの意見を拾うことも必要。